

令和6年度 第3回学校運営協議会 議事録

1 日時

令和7年2月27日（木） 14:15～16:15

2 場所

本校会議室

3 出席者

- (1) 学校運営協議会委員（7名） ※五十音順
- | | | | | |
|------------------|--------------|-----|----|------|
| 県南広域振興局 | 経営企画部 産業振興室長 | 小田島 | 玄 | |
| 株式会社一関 LIXIL 製作所 | 総務課長 | 川堀 | 真俊 | <欠席> |
| 岩手県立千厩高等技術専門校 | 校長 | 菅原 | 利之 | |
| 一関市教育委員会 | 学習指導専門員 | 鈴木 | 秀行 | |
| 株式会社マリアージュ | 代表取締役 | 鈴木 | 泰洋 | |
| 岩手県立千厩高等学校 | 前PTA会長 | 千葉 | 栄生 | <欠席> |
| 一関商工会議所千厩支所 | 支所長 | 千葉 | 幸男 | |
| いわて平泉農業協同組合 | 千厩営農経済センター長 | 中山 | 淳史 | <欠席> |
| 岩手県立千厩高等学校 | 校長 | 熊谷 | 道仁 | |
| 岩手県立千厩高等学校 | 副校長 | 平田 | 勝彦 | |
- (2) オブザーバー（3名）
- | | | | |
|--------|----|----|--|
| 教務主任 | 鈴木 | 健一 | |
| 生産技術科長 | 箱石 | 健 | |
| 産業技術科 | 飛鳥 | 剛史 | |

4 次第 ※司会：副校長

- (1) 開会のことば（副校長）
- (2) 校長挨拶
- (3) 報告

令和6年度学校概況（副校長）

- ア 在籍生徒数
- イ 出身中学校
- ウ 進路状況
- エ 部活動等の状況
- オ 主な資格等の取得（合格）者数
- カ 地域交流等

- (4) 協議 ※議長：副会長（千葉）

令和6年度学校評価

ア 結果と分析

- 〔委員A〕 生徒、保護者、教職員に対する質問について、共通する項目は、三者それぞれを分析することにより多面的な学校評価が可能となる。来年度、質問項目の設定及び分析に工夫を凝らしてはどうか。
- 〔委員E〕 学習について、家庭学習の在り方を含め、学習環境を整えるための取組を追求することが、学習時間の増加へつながるのではないか。
- 〔委員C〕 市内小中学校の現状
 - ・メディアへの接触時間が長すぎる。
 - ・ICT 指導員を招いて研修会を実施し、児童生徒や保護者を対象に啓発的活動をしている。

- ・学力向上について、基盤学力としての100マス計算、漢字、ことばをしっかり固めた上で授業がある。
- ・教職員も学びながら授業改善をし、授業力の上に児童生徒の学力がある。
- [委員D] ・スマートフォンを視聴することが、その人の価値観を創っている。
- ・結婚式場を経営している。新婚カップルは、結婚式に対する知識やイメージがなく、結婚の意味や披露宴の価値を教えなければならない。
- ・商品を教育しないと販売できない。
- [委員B] ・当校には、勉強の仕方を知らずに入学する学生もいる。できない箇所をどのように勉強すればよいかなどの学習方法が分からないので、一から教えなければならない。
- ・学習習慣は、入学時の18歳段階までに染みついている。勉強しなくても何とかなると考えている学生は、授業について行くことができない。
- ・小中学校の段階で、自分が何をしたいか方向性を決める必要がある。
- [委員A] ・目的が明確な子どもは、勉強して進路も自分で考えることができる。しかし、そうでない子どもは、たくさんの情報があるが考えることができない。あるいは考えることを放棄している。
- ・小さい頃からのキャリア教育を通して、自分自身で考え、自分自身で選ぶ経験をもっとしなければならない。そのことによりもっと勉強するはずである。
- [委員C] ・あいさつについては、どこの学校でも教育活動全体を通して様々な取組を行っている。
- ・東磐井地区には三世代家族が多い。子どもは、祖父母から有形無形の影響を受けて生活している。学校生活の中でもほんわりした温かさがあり、知恵を備えている。

イ 学校関係者評価
ウ 改善方策

別紙「令和6年度岩手県立千厩高等学校学校評価報告書」参照

(5) その他
特になし

(6) 閉会のことば (副校長)

(様式1)

令和6年度 岩手県立千厩高等学校 学校評価報告書

校長：熊谷道仁

総合的な評価	<ul style="list-style-type: none">・全体として、保護者・生徒対象の学校評価アンケートの結果から、本校の学校経営については概ね理解されていると考える。・生徒は総合的に充実した学校生活を送っているが、家庭学習の習慣化及び学び直しによる基礎学力の定着が課題である。・3学科それぞれの特長を活かした教育課程のもと、学校行事や部活動等を通し、共に学び高め合う風土を育てている。その教育的成果について、保護者をはじめとする外部への情報をさらに発信する必要がある。
--------	--

重点目標	達成指標	自己評価		学校関係者評価	改善方策
		評価項目及び実績等	達成状況		
1 「わかる」授業と個に応じた学び（個別最適）の実践や協働で学ぶ活動の往還により学習の定着を図る	・「授業の内容を概ね理解していると思う」生徒の割合【80%以上】	・「授業の内容を概ね理解していると思う」生徒の割合【83%】達成 普通科 85% 生産技術科 83% 産業技術科 78%	○	・生徒による学校評価の家庭学習時間は、2時間以上が8%、1時間～2時間が16%（昨年度より約半減）、1時間未満が46%、まったくしないが30%となっており、家庭学習の習慣化が求められる。 ・9/17～10/31をICT授業推進強化期間と位置づけた。電子黒板に「教科書」や「問題」を投影する教員が増えてきた。しかし、生徒がタブレットを使用することによる協働的な学びの方法や情報活用能力を育成するためには、さらなる教員研修が必要である。	・学習への自己探究をするために、①自己評価 ②目標設定 ③学習スタイルの理解 ④計画立案 ⑤フィードバックと調整のステップを踏む。 ・ICT機器の効果的な活用を校内研修で取り入れ、教育の質を向上させるために、①基本的なスキルの習得 ②目的に合わせた活用法 ③実践的なトレーニング ④継続的なサポートとフィードバック ⑤最新の技術動向の把握をし、よりインタラクティブで魅力的な授業を提供できるようにする。
2 心身ともに健康でたくましい生徒の育成を図る	・「自分の健康をよりよくしようと考えている」生徒の割合【90%以上】	・「自分の健康をよりよくしようと考えている」生徒の割合【91%】達成 普通科 94% 生産技術科 89% 産業技術科 84%	○	・身体的に良好な状態も大切である。しかし、生きる力として、困難な問題、危機的な状況、ストレスといった要素に遭遇しても、立ち直ることができる心の回復力（レジリエンス）を鍛えなければならない。	・コミュニケーション力を高めるために、日常生活の中で意識的に聞く力（アクティブリスニング、共感的な態度、集中力の向上等）と想像力（問題解決、計画、共感等）を向上させ、レジリエンスを鍛える。

(様式1)

<p>3 すべての教育活動がキャリア教育に通じるとの認識のもと、進路実現に向けた指導の充実を図る</p>	<p>・「将来の進路を考えて生活している」と思う生徒の割合【80%以上】</p>	<p>・「将来の進路を考えて生活している」と思う生徒の割合【82%】達成 普通科 85% 生産技術科 75% 産業技術科 84%</p>	○	<p>・これまでの産業技術科におけるインターンシップの実施に加え、普通科の一部学級においても行い、職業観や勤労観を養うことができた。 ・地域との連携・協働により、地域課題や将来像などを共有することが、生徒のキャリア形成に役立つのではないかと考える。</p>	<p>・さらに企業とつながる機会（インターンシップ、職業体験プログラム、キャリアフェアや説明会、ボランティア活動等）を設定することにより、将来のキャリア選択に役立たせる。 ・地元で就職した卒業生の経験やアドバイス、キラキラした姿を見聞きする機会を創出する。</p>
<p>4 学科毎の学びの特長を活かし、課題を設定、主体性を活かした探究活動を推進して課題解決能力の育成を図る</p>	<p>・「『総合的な探究の時間』『課題研究』の授業に意欲的に取り組んだ」生徒の割合【80%以上】</p>	<p>・「『総合的な探究の時間』『課題研究』の授業に意欲的に取り組んだ」生徒の割合【87%】達成 普通科 82% 生産技術科 91% 産業技術科 97%</p>	○	<p>・普通科の「総合的な探究の時間」における実施の在り方について、従来の学年裁量から、生徒一人ひとりが設定したテーマについて探究する自由度の高い方法に刷新した。生徒は、毎回探究した学びを大学ノートに記録して蓄積し、ポートフォリオの一面となっている。</p>	<p>・普通科における十日報の本格的導入により、1人1台端末の利用を加速化し、主体的で深い学びにつなげる。 ・地域連携委員40名（学校運営協議会高校魅力化推進コンソーシアム、総合的な探究の時間プログラム協力）を招聘し、共に学び合う機会を創出する。</p>
<p>5 実効性のある「学校いじめ対策組織」を構築し、組織的にいじめの未然防止・適切な対処に当たる</p>	<p>・「学校は、いじめの未然防止と早期対応に取り組んでいると思う」生徒の割合【80%以上】</p>	<p>・「学校は、いじめの未然防止と早期対応に取り組んでいると思う」生徒の割合【84%】達成 普通科 88% 生産技術科 79% 産業技術科 80%</p>	○	<p>・学校評価によると、教職員（98%）と保護者（55%）の間で、いじめの未然防止と早期対応に対する取組や捉え方に大きな違いがある。学校の取組等について、もっと保護者へ発信する必要がある。</p>	<p>・保護者の学校に対する関心度を高めるために、いじめの基本方針や問題の未然防止に向けた注意を促す資料等について、HP、マチコミ等の活用により、保護者へ幅広く発信する。 ・学校評価における評価基準に加え、保護者が回答するための判断材料として取組事例を挙げる。</p>
<p>6 体罰・暴言等の不適切な指導を発生させない組織作りを進める</p>	<p>・「先生は、生徒を個人として尊重している」生徒の割合【90%以上】</p>	<p>・「先生は、生徒を個人として尊重している」生徒の割合【91%】達成 普通科 93% 生産技術科 80% 産業技術科 96%</p>	○	<p>・学校としての宣言を『「居心地のよい学校」に向けて、生徒一人ひとりの多様性を尊重することを宣言します。』とし、学校全体で生徒の人権を尊重した教育活動を行う意識を醸成した。 ・TSUBASA モデル研修会の内容が、一過性で終わらないために、①毎月のコンプライアンスの取組、②上期・下期職場研修会等と連続性を保ち、一人ひとりの職員が自分事として認識することを促した。</p>	<p>・担任と学年との連携を密にし、個別面談等を通して生徒理解に努める。 ・既存の年4回実施される「学校生活アンケート」により、生徒や保護者の回答に注視し、問題解決に向けて組織的な対応をする。</p>

(様式1)